

ドリンク原料茶の 多収栽培技術確立に向けた取組

一 はじめに

1世帯当たりの茶の年間支出額は、近年ではドリンク茶がリーフ茶を上回り、支出額全体の約67%を占めています(図1)。また、20〜30代の茶の消費は、ドリンク茶が主体となっています(図2)。このため、今後ドリンク茶の需要は比較的安定していく

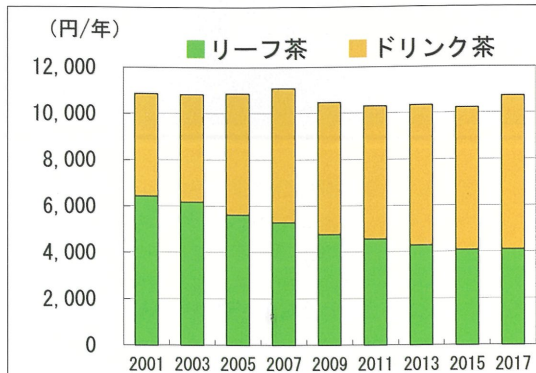


図1 1世帯当たりの茶の支出額の推移(全国)
出典: 総務省家計調査を一部改変

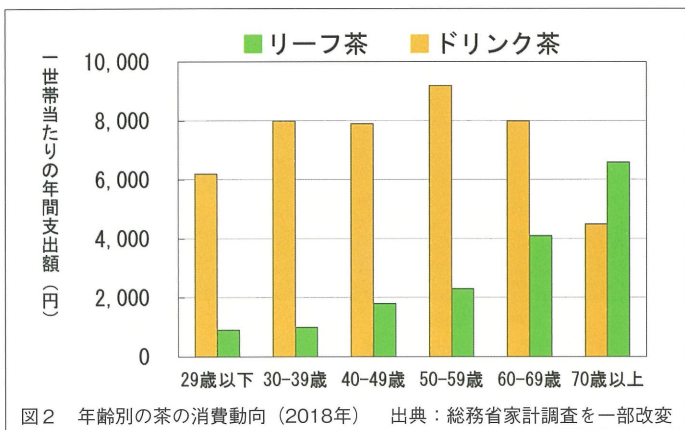


図2 年齢別の茶の消費動向(2018年) 出典: 総務省家計調査を一部改変

二 摘採時期と収量・品質の関係

当センターの「やぶきた」ほ場において、摘採時期を変えた時の一番茶の生葉収量と荒茶成分(全窒素含有率及び繊維含有率)を調査しました。試験では、4・5葉期を「適期」とし、「適期」から3日おきに摘採を行いました。その結果、過去の知見と同様、摘採日が遅いほど収量と繊維含有率が増加し、反対に全窒素含有率は減少しました(表)。また、製造した荒茶を飲料メーカー2社(A社及びB社)に評価を依頼したところ、A社は比較的品質の高い(摘採時期の早い)茶を、B社はすべての茶をドリンク原料茶として「適性あり」と評価しました。

このような状況を背景に、茶業研究センターでは、ドリンク原料茶の栽培技術の確立を目的として、摘採時期と収量・品質の関係、多収摘採茶園における茶の生育状況、品種別の収量性などを調査しています。本稿では、これまでの研究成果と今後の取組を御紹介します。

このような飲料メーカーごとの評価の違いは、メーカーによってドリンク茶の商品設計が異なることや、ドリンク原料茶に様々な形態(粉末茶や濃縮液等)があることが要因として考えられます。ドリンク原料茶に求められる品質や形態が一律でないため、どのような品質の茶を生産

表 摘採時期と収量・品質の関係

試験区	摘採日	収量 kg/10a	全窒素含有率 %(d.w.)	繊維含有率 %(d.w.)	A社 評価	B社 評価
適期	5/6	677 ^a	5.3 ^a	20.9 ^a	○	○
適期+3日	5/9	856 ^{ab}	4.6 ^b	24.1 ^b	○	○
適期+6日	5/12	1,001 ^{bc}	4.5 ^{bc}	24.9 ^b	×	○
適期+9日	5/15	1,205 ^c	4.0 ^c	27.3 ^b	×	○

注1) 同一の上付き英小文字を付した区間に有意差なし (Tukey, 5%)
注2) ○: ドリンク原料茶としての適性あり、×: 適性なし

三 多収摘採茶園における生育状況

牧之原市内の茶園の生育状況を調査したところ、慣行の茶園では7月下旬に三番茶芽の硬化が始まり、8月上旬に秋芽の萌芽期を迎えました(図3)。これに対し、ドリンク原料用の茶園では8月に入ってから硬化が始まり、秋芽の萌芽期は8月下旬となりました。当センターの茶園において、適期に一番茶を摘採した場所(慣行区)に比べて、適期から一週間後に摘採した場所(多収区)では生育時期の遅延がみられました(図4)。

このことから、多収摘採茶園の摘採時期と防除時期は、周辺の茶園とずれるものと考えられます。多収摘採を行う場合は、周辺の状況に配慮

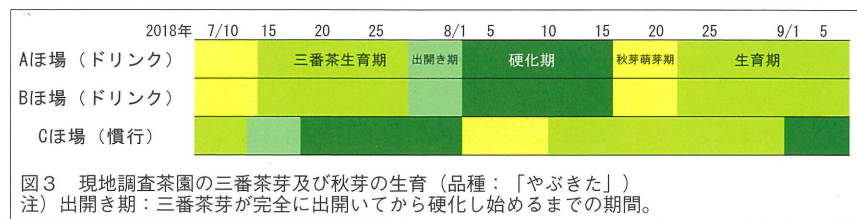


図3 現地調査茶園の三番茶芽及び秋芽の生育(品種: 「やぶきた」)
注) 出開き期: 三番茶芽が完全に開いてから硬化し始めるまでの期間。

した茶園の選定や病害虫防除を実施するようにしてください。



図4 多収摘採茶園の二番茶芽の生育の様子(品種: 「やぶきた」、撮影日: 2019年6月23日)

四 品種別の収量性評価

ドリンク原料茶生産においては安定した収量が必要です。そこで、収量性に優れた品種「つゆひかり、さやまかおり、めいりよく、ふうしゅん」について、摘採時期を遅らせ、一番茶と二番茶の生葉収量を調査しました。その結果、調査した品種はいずれも対照の「やぶきた」を上回る収量が得られました(図5)。特に「つゆひかり」と「さやまかおり」は、一番茶が10a当たり1500kg以上得られました。既にドリンク原料茶生産に取り組んでいる方や、今後取り組む予定がある方は、売り先の要望を踏まえて

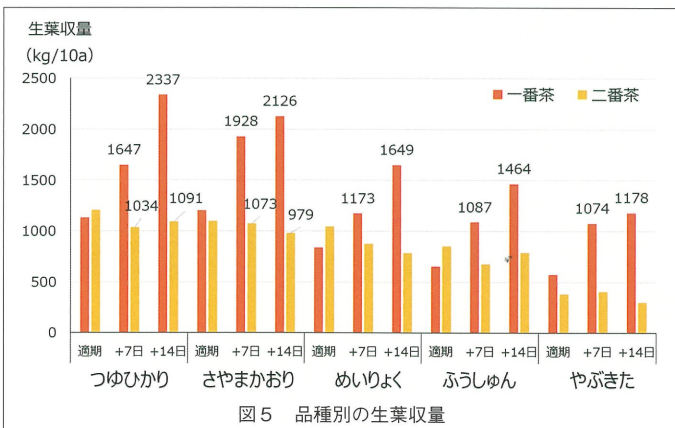


図5 品種別の生葉収量

これらの品種の導入を検討してください。

五 今後の研究

今回御紹介した内容は、予備試験の成果であり、未解決の課題が残されています。そこで、当センターでは本年度から県の「新成長戦略研究プロジェクト」として、ドリンク原料茶生産に関連する研究に体系的に取り組んでいます。当プロジェクトの概略は以下のとおりです。

- (1) 茶園管理作業の省力化
- (2) 安定多収栽培体系の確立
- (3) 低コスト製茶加工技術の開発

六 おわりに

今回、取り組む当プロジェクトの研究成果や進捗状況については、当センターの成果発表会や各種セミナーなどで、随時、皆様方に情報提供を予定しています。

菊川市倉沢1706-11
静岡県農林技術研究所
茶業研究センター
茶生産技術科
ES-kenkyu@pref.shizuoka.lg.jp

するかについては、売り先との調整が大変重要となります。

私か紹介します!



静岡県農林技術研究所
茶業研究センター 茶生産技術科
主任研究員 土屋雄人